

心洗われたベルギー渡航記

久保哲也¹⁾

Records of my impressed interchange through KENDO in Belgium

Tetsuya KUBO

ベルギーの首都ブリュッセルは1979年、生誕1000年を迎えた中世が息づく麗しき古都で知られる。古くはセンヌ川の湿地帯であったここは、その中之島であったサン・ジェリー島に、当時の領主ロタリングア公爵が築いた館を「沼の中の家」Bruocsellaと呼んだのを地名の由来とし、数々の試練の歴史を経験しながらも発展を続け、今や新しいヨーロッパの首都として華やかに羽ばたいている。その華やかさは他国とは異なり、EU（欧州連合）やNATO（北大西洋条約機構）の本部を置く近代的国際都市でありながらも街の至るところに中世の石畳が残り、歴史的建造物や様々な美術館が存在する。郊外には森や城が点在し、伝統文化の面影を随所に残している。

このような歴史と伝統に彩られた国際都市

に、ハンガリー人牧師による凶悪殺人事件に続き、ダイオキシン問題などが起きたことにより、国際的にベルギーの評判は芳しくなかった。それを吹き飛ばしてくれたのが、フィリップ皇太子とマチルド・デデウケムタコー嬢の、12月4日にサン・ミッシュエル大聖堂で行われた結婚式である。世界で最も日本の皇室と親交が深いと言われるベルギー王室



写真1 日本からの講習会参加メンバー
(ベルギー王室の前にて)



写真2 世界で最も美しいと言われる広場
(グランプラス)

1) 体育センター



写真3 可愛い豆剣士達と…

の慶事だけに、我が国からは皇太子ご夫妻が4年半ぶりに海外公式訪問をされた。その4年半前、皇太子殿下とフィリップ皇太子は、英国のアンドリュー王子の結婚式でお会いした際に意気投合し、お互いの結婚式に招待しようとお約束されたとの余話がある。まさにそれを実現されたのだ。

今回参加した講習会はこのような絶好な時期にも恵まれたのである。

期待膨らむベルギーでの稽古

「アン、デュッ、トユアー」

外は小雪が舞うマイナス2度。まだ日が昇らない静かなうちに朝稽古が始まった。午前6時、平日にも関わらず大勢の人が集まっていて、日頃の成果を私達にみせようと必死になって素振りをしている……

私は毎年冬に実施されている「ヨーロッパ剣道・居合道講習会並びに中倉杯」に明治大学教授平川信夫先生（S37，教育大卒）をはじめとする15人からなる講師陣の一員として12月13日から25日までの間、ベルギーを訪問した。

毎朝6時より1時間五角稽古を毎日行った。そして皆さんが仕事している昼間のうちに観光し、午後6時から3時間稽古するというのが大まかなスケジュールである。時には色々な都市に遠征に行って廻った。各地で歓迎のプレゼントをいただき、そのお返しにこちらからは竹刀や古くなった防具をそれぞれプレ

ゼントし、大変喜ばれた。ベルギーは世界のダイヤモンド加工の70パーセントを占めていることもあり、取引の中核という国柄、ヨーロッパの中でも豊かな国ではあるが、それでもなかなか防具は高価なため手に入らないようだ。

稽古内容としては、時間の大半を基本練習が占めた。私達講師陣が元に並び、その前に4から6人ずつ彼等が並んだ。その日の担当の講師が全員の前で細かく説明をし、その後各講師がそれぞれ教えるというものだった。4本ずつ順番に打ち込ませ、一回りしたらチェックタイムである。片言の英語と大げさなジェスチャーで「モア、気合い、気合い」「モア、リラックス」「センター、ストレート」などと言うこちらの必死な説明に大きく頷いてくれた。

それにしても、今回の稽古を通して見習うとことが沢山あった。まずは文化の違うベルギーで礼法がしっかりとしていたことである。挨拶にキスを交わす国であるためパーソナル・スペースの違いにより、大変興味もあった間合いもきちんととっていた。稽古でも蹲踞の時から気が充実しているようで「何とかして一本とってやろう」という勢いさえ押し寄せてくる気がした。技術的にはまだまだ私達に分があるようだが、体当たりでは我々がよろめきそうになることもあり、彼等のひたむきさと体力を考えるとおちおちしてられない気がした。ビシビシと伝わる彼等の気持ちに忘れかけていた何かを思い出し、とても新鮮な気分であった。互角稽古でもその情熱に頭が上がりなかった。休んでいる人は一人もおらず、とにかく空いている人を見つけては飛ぶような勢いで稽古をお願いしてくるのである。熱気のこもった稽古で広い会場はいっぱいであった。また、子ども達が多かったのにも驚いた。アントワープ、ブリュッセルなどでも増加の傾向にあるようだ。彼等の要望で一日アントワープにも足をのぼし、子

ども達を対象とした講習会も行った。約70名が集まり、可愛い気合いが道場に響きわたった。その将来に明るい見通しを感じた。

剣道・居合道講習会ならびに中倉杯剣道大会

17日(金)～19日(日)までの3日間にわたり、「第8回冬季ヨーロッパ剣道・居合道講習会及び中倉杯剣道大会」が開催された。ノルウェー、フィンランド、ドイツ、オランダ、ルクセンブルグ、スイス、フランス、イギリス、アイルランド、イタリア、スペイン、ポルトガル、そして地元ベルギーの13ヶ国から約350名の老若男女が参加した。

講習会は ADEPS スポーツセンターの大ホール2つ(剣道有段者と居合道)と小ホール1つ(剣道の級と初心者)の3つの会場で行われた。私はこの初心者の方を担当した。講習日程は午前9時から12時、午後2時から6時までの計7時間にもおよび、午前11時と午後5時からのそれぞれ1時間は、全員で剣道の合同稽古を実施。初心者や子ども達は有段者の稽古を見学してもらい、受講生同士の交流を図る時間帯となった。

講習内容は礼法、作法から始まり、基本動作並びに基本打突に対人技能。そして日本剣道形に試合練習。さらに掛かり稽古に回り稽古などと盛り沢山のため、食事もそここのハードなものであった。しかし、受講生達の何でもこの機会に習得しようという貧欲な態度と強靱な体力の前に、私達も引きずられて

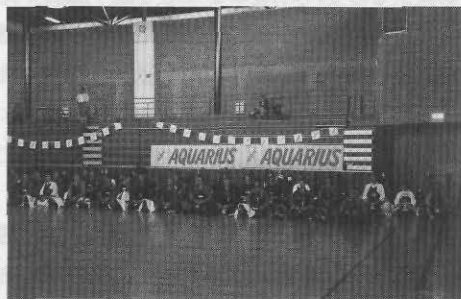


写真4 稽古前の黙想(ADEPS スポーツセンター大ホールにて)

疲れを感じる暇もないほどだった。

ベルギーの人達と稽古をしていて一番に思うことは真っ直ぐな振りをして、姿勢が崩れない、いわゆる正しいといわれる剣道をしていることである。約20年教え続けてこられた平川先生の剣道を忠実に守っている様子が伺えた。素振りにしても、竹刀がお尻につくまで肩全体をつかかって大きく振りかぶっていた。私はよく日本でも注意されているのだが、小手をつ打つ時に左拳を大きく中心から外し、手首のスナップで打つ、いわゆる平打ちといわれる打突してしまった。その時に後ろで見ていた先生から「それはやらないでくれ」と注意をうけ、ハッとした。ベルギーの人が真っ直ぐな正しい剣道を志しているのに私は当たるからといって、平打ちしていたことが情けなかった。しかし、今大会でも日本の悪いと言われる、試合に勝つためだけの技がみられていたのも事実である。特に、日本人がよく訪れ接する機会の多い、イギリスやドイツ等の選手はやはり真似をしていて見苦しい試



写真5 ヨーロッパジュニアチャンピオンのウィリー・アーク君(17歳)



写真6 小便小僧と並び有名な小便少女
(右は東海大学主将の天野君)

合をしていたのが残念である。

彼等の剣道を通して自分の剣道を見直すいい機会でもあった。

目の当たりにしたベルギーでの体育授業

私達が宿泊していたのがスポーツセンターということもあり、ベルギーの体育授業を垣間みることができた。そこは観客席のついた大ホール、中ホール、床が板の小ホールをかかえ、ガラス張りのスカッシュのコートが無数にあった。大ホールではフットサル、テニス、ラクロスなどが時間を区切って行われており、爽やかな汗をかいていた。シャワーで汗を流した後は、これもまた充実したビュッフェで夜中まで団欒していた。とにかく人生を有意義に過ごしているようにみえる。ここで一日のストレスも発散され、気持ちよく寝ることができるであろう。

また、昼間には小学生低学年の可愛い子ども達が手をつないでしっかりと2列になり行進してきた。フロントの従業員にも礼儀正しく挨拶する等微笑ましい光景であった。こちらの防具をつけた異様な姿をみて「キャー」とはしゃいだ子を先生が叱ったのもまた可愛かった。フロントに「社会見学？」と聞くと、なんと体育の授業をしに来たのだと言うのである。大変興味があったので、大ホールを出発までの時間覗いていた。そこではグループ指導が行われていて、大ホールではトランポリン、フラウープ、ボール蹴り、器械体操、

エアロビクス等と幾つかの小グループに別れて楽しそうに行われていた。それぞれの箇所には先生がおり、丁寧に指導している様子が伺えた。

また、そこに宿泊してこともあり同世代の人と夜中まで飲みながら話す機会にも恵まれていたため、このことについても聞くことができた。彼等が言うには、子どもの頃から体育の授業などでスポーツセンターを頻繁に利用していたこともあり、何も違和感なく会社帰りに寄って汗を流すことが習慣になっているのだという。スポーツセンターには内外の体育施設は勿論のこと宿泊施設、設備、食堂と充実している。全館空調で過ごしやすいの利用料金はほんの少しだという。外は雪が舞っている悪天候にも関わらず、どの施設もひっきりなしに利用されているのには驚かされた。さらに、稽古場所が曜日によって移動したため、他のスポーツセンターも見ることができた。一つ一つがそんなに遠くもないのに、400mトラックやサッカー場なども完備したかなりの規模のセンターがいくつもあるのにも驚かされる。利用面でもしっかりしていた。とにかく時間に正確である。時間ピッタリになると、こちらがまだ防具を脱いでいるかないかのうちにもう3 on 3を始めていた。日本では考えられないことだ。また、時間になるまでは、入口の外で延々と十分すぎるくらい長い時間ストレッチをしていたのが印象的であった。自分の体を本当に大事にしているようであり、時間となったら直ぐ試合が始められるのも頷ける。最大限に与えられた時間と場所を有効に利用しようという態度に大いに感銘した。

思い出となる出来事

今回のベルギー訪問では多くの出会いや思い出となる出来事が沢山あった。中でも夜明けまで熱く語り合った同い年のロシオンのことが忘れられない。彼は酔っぱらいなが



写真7 夜明けまで熱く語り合ったロシオン
(左側)

らも私に気を使ってゆっくりわかりやすい英語で話してくれた。同じ第2外国語を話す立場として自分が情けなかったが……彼が言うには「ヨーロッパにくる先生は八段をはじめ、わりと年齢の上の人が多。その人達はいつも、自分を誉めてくれた。でも、何かいつも心の中にこちらの機嫌をとっているだけではないか、本当にこの剣道でいいのか、と、もどかしさを感じていた。海外の試合にでないで稽古する機会がない私達が、今回久保先生のような若い先生が来てくれたことにより、若い日本人と稽古をすることができた。先生は難しいことを言わず(本当は言えなかったのだが)、こちらの技の甘かったところ、下がったところ、居着いたところにパンパンパンとものすごい勢いで打ち込んできてくれた。あれをやられたことで自分の剣道の未熟さを肌で感じるすることができた。なんだか嬉しかった。」

ベルギーに発つ前に自分の役割を考えたとき、知識、語学力がない分、少しでも元気のある剣道を心がけて、彼等に何か影響を与えることができたなら……とと思っていただけにロシオンにこのようなことを言ってもらったことが本当に嬉しかった。

深酒で思い出したが、ベルギーではビール2杯までは飲酒で捕まっても見逃してくれるらしい。むこうの警察官が言っていた話だから間違いない。もし、車を止められて「飲んでる？」と聞かれたら「ビールを少し」と答

えると「気をつけて帰ってね」と言うのだそう。逆に飲んでいるのに「飲んでない」等と言おうものなら、捕まるといっていた。なんと大らかな国なのだろうか。いや、お酒に強い人種だからだろうか。

また、私達はスポーツセンターに泊まっていたが、同時期にハンガリー少年少女合唱団の団員約30名と2日間一緒になった。朝食前、その少年少女達はヨーロッパ民謡を数曲、そして「菜の花」を2日間にわたって歌ってくれた。さすがにこのベルギーの地で「菜の花」を聞くとは思わなかった。粋な計らいである。清らかなハーモニーと可愛らしさに疲れも吹き飛んだ。

そして、サヨナラパーティーでは講習会に参加した高校教師や芸術家らで結成しているバンドが中心となって演奏してくれ、さらにカントリー・シンガーのオランダ人女性の迫力ある美声も堪能した。そんなほろ酔い気分も束の間、七段をもつイギリス人が恥ずかしがる私を無理矢理引っ張っていき、こういうところでは男性から女性を誘うのが礼儀なんだとしつこく教えてくれるのである。私が女性に声をかけるまでジーンとみている始末。こうなったらと勇気を振り絞って言った言葉が

Shall we danse?

ダンスなんて何もわからなかったけれども、見よう見真似と女性のエスコート(!!)でなんとか踊ることができた。全く初めての経験だった。

こうして歌にダンスに夜の更けるのも忘れて交流を深め合ったのである。

今も尚、二つの悩み

ふとベルギーでのことを思い出すと、今でも尚2つの不安が襲ってくる。

一つは、あのオランダチームのように2メートル150キロの巨体がまともに剣道を練習したら、私達は勝てなくなるのではないかと

にもかかわらず、2メートルの人が少し仰け反るとこちらの竹刀はまったく届かず、逆に相手は手を伸ばせば、別に踏み込んで打つ必要がなくこちらの面に竹刀が届くのである。しかも、試合では場外に2回出たら、反則2回で相手に一本である。寄り切られたら……本当におちおちしてられない。

もう一つは、自分の語学力である。安易にアドレスを教えてしまったため、毎日のようにメールが送られてくる。今は世界中タイムリーにメールでやりとりができ、大変便利であるという有り難さはあるが、日本語でも答えるのが難しいことをご丁寧に英語で書いてきてくれるのである。何行にもわたり沢山書いてくれるのに、酷いときには私の返信メールは

Do your best! Thank you!

これでは情けない。これを機会に語学も頑張りたいと誓う今日この頃である。

おわりに

ベルギーを離れるときに「また来て欲しい」「もっと稽古をしたかった」と声をかけられ、一所懸命剣道に取り組んでいる彼等に、将来少しでも力になりたいと思いました。今回、

剣道を通して色々と理解し実感できたことは、これからの人生観や剣道観に大きく影響することは間違いありません。異国の土地で、剣を交え、語らい、そして生活を共にした今回の講習会に参加できたことにとっても感謝しています。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった連盟の先生方、快く送って下さったセンター長をはじめとする教官の方々、技官の皆さん、暖かく接していただいた一緒に参加した講師の先生方に対し、深く感謝申し上げます。

本来ならばここで終わるところですが、この何年も続いている講習会並びに中倉杯を団長として支えてこられ、また、ご自身93才まで現役であられた中倉先生（範士九段）が2月9日に亡くなられました。今後このような素晴らしい機会に恵まれたときには先生の遺志を引き継ぎ、海外においても正しい剣道が受け継がれていくように頑張りたいと思います。

中倉先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

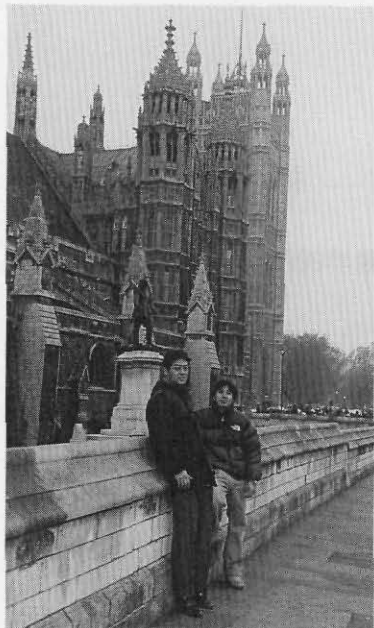


写真8 伝統文化の面影を随所に残している